

# 昭和 10 年代における<sup>まいだみのる</sup>米田實の国際認識

報告者：伊藤信哉（松山大学法学部）

sito@cc.matsuyama-u.ac.jp

## はじめに

- (1) 米田實（1878—1948）の経歴と業績
- (2) 本報告における問題意識

## 1. 「盧溝橋」以前（昭和 10 年 1 月—昭和 12 年 7 月）

### ◇基本的認識

- ① 英米での滞在経験により培われた「両国との国力差を熟知した上での国際協調主義」
- ② ロシアに対する徹底的な不信感とドイツの現状打破の動きに対する警戒感

### (1) ドイツ

- ◇ 1935 年ごろはヒトラーの現状打破の動きに対し批判的 → 仏の「包囲外交」に期待
- ◇ ドイツの経済力（国力基盤）が脆弱であることへの懸念
- ⇒ 日独防共協定（昭和 11 年 11 月）の頃から、日独の接近に対し強い警戒感
- … 日独伊 vs. 英仏露 のような対立構図の形成に対する恐怖

### (2) ロシア

- ◇ 基本的に強い警戒心、あるいは不信感を抱いていた
- ◇ 1935 年半ばごろまでは、ロシアの国内事情（政情不安）から安心感を示す
- ◇ 1936 年ごろから、警戒心が復活 ← コミンテルンによる「人民戦線」戦術の展開

### (3) イギリス

- ◇ 日本とイギリスは激しい商業競争の関係にあるが、戦争にまではいかないとの認識
- ◇ 日本もつとめて同国とは良好な関係を保つべき

### (4) アメリカ

- ◇ 大恐慌以来、アメリカは国内問題に手一杯で、極東に出てくる余裕なし
- ＝基本的に良好な関係
- ◇ ただし、今後の動向しだいで米国の極東再進出、日本との衝突もありうる

## (5)中国・満洲国方面

- ◇ 1935 年ごろは日中関係について楽観的な認識が目立つ
  - … 「日本もこれ以上、両国関係を悪化させない努力が必要」とする
- ◇ 1937 年初頭ごろから認識が変化、将来に対する危機感
  - ← 35 年末の華北分離工作・幣制改革と、それによる抗日の激化・中国の国力強化

## 2.「盧溝橋」から欧洲開戦まで(昭和 12 年 7 月—昭和 14 年 8 月)

### (1)昭和 12 年後半

- ◇ 日華事変について
  - ・ 性格づけ：「日一日昂上する支那民族統一熱と、我国の大陸政策の進みとが、茲に強く衝突したのが盧溝橋事件」＝日中の対等な衝突
  - ・ 国際法上の位置づけ：不戦・九国条約違反でない（当時の国際法学界の通説的見解）
  - ・ 今後の見通し：長期化を予想
    - 英米露の動きを注視…英米両国が協調して介入する可能性は小さい
  - ・ 中国認識：「支那人は〔…〕受動的抗争力に於ては天下稀有な民である。強く目立つた反抗力を欠く代りに外面弱くて然かも長く耐ゆる実際根強い反抗力に於ては、他の民族の及ぶところではない」
- ◇ 日独伊三国防共協定がもたらすもの＝英を中心とする反ファッショ・ブロックの形成
- ◇ 日英米戦争の可能性…欧洲大戦の再発・反ファッショ思潮の高まり

### (2)昭和 13 年

- ◇ 国際社会の構図：世界を二種類の対立（左と右／持てる国と持たざる国）で説明
- ◇ 日華事変について：英米露の動き→「決して極端な悪化状態に進んでいない」  
講和外交進捗の希望→実現の見通しは悲観的
- ◇ イギリスの宥和政策：日英関係の改善に期待を寄せる

### (3)昭和 14 年 1—8 月

- ◇ 国際社会の構図：世界を防共ブロックと民主政治ブロックの対立により説明  
これ以上の独伊との接近は日米関係をさらに悪化させると警告
- ◇ 日華事変について：講和外交進捗の希望→実現には悲観的  
英米の動き…アメリカの介入強化や英米協調に対する警戒心
- ◇ ヨーロッパ情勢：英仏 vs. 独伊の緊張激化（戦争）と米国による英仏援助の可能性

### 3. 欧洲開戦から日米開戦まで(昭和14年9月—昭和16年12月)

#### (1) ドイツ

- ◇基本戦略：国力基盤の制約から短期戦をめざすはず
- ◇戦況について：目下のところ好調だが、その足元は脆弱
- ◇独ソの提携関係：長続きしないと予測
- ◇独ソ戦：「ドイツとソ連は、かく成行くべき運命」

#### (2) ロシア

- ◇基本戦略①：資本主義国同士を徹底的に争わせ、疲弊した諸国の共産化を図る
- ◇基本戦略②：侵略主義・膨脹主義 ←不可侵条約の蹂躪をも平然と行う

⇒松岡のいわゆる「四国協商」構想（日独伊三国同盟／日ソ中立条約）には反対

#### (3) イギリス

- ◇基本戦略①：長期戦・経済戦でドイツを疲弊させる
- ◇基本戦略②：アメリカによる支援の確保
- ◇対日関係：日と独露が接近するのを阻止するため、中国における反日的な姿勢緩和  
→日独伊三国同盟後は強硬姿勢＝「大東亜新秩序」の峻拒

#### (4) アメリカ

- ◇基本戦略：局外中立を維持しつつも、英仏を支援→やがて直接参戦の方向へ
- ◇対日関係：日米戦争の必然性は明言せず→内心では昭和16年4月ごろには確信

#### (5) 中国

- ◇ほとんど言及なし

おわりに